短歌

信州遠山郷

磯前睦子

見上げたる家に問いたし何故そこにと　空行く鳥の灯台のごと

山の上　山の下にも暮らしあり　暮らしを結ぶ細き道あり

牛乳の吹きこぼれるごと霧の湧く　家畑沈め深き谷より

賑わいの祭りの記憶を碑に刻み　人ここを去るお社残し

小屋のようなお社一つ残されて　人なき里に遅き日の射す

ハチマムシ漬け込む酒の飲み比べ　宿の亭主の講釈楽し

奉納と「ワラ四束」は披露さる　田のなき里の祭りの社殿に

一千年　村のもてなし変わらずに　神通うらし霜月ここに

夜通しの祭りの火囲む里人は　大根汁食む儀式のごとく

祭り終え　闇の山行くライト見ゆ　道のあるらし家のあるらし

神々の棲む里と呼ぶ遠山に　神の恵みのソバの花咲く

下栗の秋の陽の中手を伸ばす　ほんとの空に届く気のして

下栗の人は人恋ふ　又来てな　祭りの時にまた来てなあと

信じられん暮らしの日々を生きてきたと　翁の笑みは深き皺の中

食べた日々遠山郷で聞くヒエが　花屋に並ぶバラの隣に